



Title	和歌山県の盆行事 : 日高郡由良町興国寺燈籠焼きを中心に
Author(s)	栖原, 志保
Citation	日本学報. 2020, 39, p. 76-95
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/85166">https://hdl.handle.net/11094/85166</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【卒業論文】

## 和歌山県の盆行事

日高郡由良町興国寺燈籠焼きを中心に

栖原 志歩

### 要旨

本論文の目的は、盆行事である和歌山県日高郡由良町の興国寺燈籠焼きについて異なる立場の視点から捉え、担い手の意識の差異について考察することである。

興国寺燈籠焼きは六斎念仏、松明踊り、大松明(土桶)、燈籠焼きという4つから成る行事であり、毎年8月15日に行われる。この行事には供養としての盆行事のほかに、仏教芸能、火祭、豊作祈願、力自慢、通過儀礼など様々な要素がある。時代や社会状況の変化に応じて運営上の変化はありつつも、行事の内容は変化することなく長い期間続けられてきた。

第1章では調査地の概要を整理し、興国寺燈籠焼きに関する地区について述べた。第2章では興国寺燈籠焼きの概要を文献調査と現地調査を踏まえて改めて整理した。第3章では興国寺燈籠焼きに関わる地域住民4名への聞き取りの中でそれぞれ浮かび上がってきたキーワードを基に、「継ぐ」、「担う」、「拝む」、「弔う」という行為に関する立ち位置の多様性の視点を持ってそれぞれの興国寺燈籠焼きへの関わり方を見た。

### 目次

はじめに	
問題意識の所在	
先行研究	
調査方法	
1 調査地の概要	
1.1 由良町の概要	
1.2 関係寺院の概要	
1.3 関係地区の概要	
2 興国寺燈籠焼きの概要	
2.1 行事の内容	
2.2 行事の準備	
2.3 行事の流れ	
2.4 行事の変化	
3 興国寺燈籠焼きに関する聞き取り	
3.1 継ぐ	
3.2 担う	
3.3 拝む	
3.4 弔う	
おわりに	
参考文献・資料	

## はじめに

## 問題意識の所在

筆者が生まれ育った和歌山県日高郡由良町には興国寺燈籠焼きという盆行事がある。筆者は小さい時から当たり前のようにこの行事に参加してきた。しかし類似の行事が和歌山県の他地域で見られないことを知り、改めて調べたいと思ったのがこの行事を卒業論文の対象として選んだきっかけである。

本論文は和歌山県日高郡由良町の興国寺燈籠焼きについて異なる立場の視点から捉え、担い手の意識の差異について考察することを目的とする。なぜなら聞き取り調査や現地調査を行う中で、担い手である檀家の人々の行事への関わり方が異なることを改めて知り、関係者の複数の要素に着目する重要性を感じたからである。さらに、地域の人々が必ずしも意欲的ではないことに気づき、この行事が続けられていることを興味深く感じたからである。

本稿では第1章で調査地の概要をまとめる。由良町の地区と檀家寺に基づく宗教的区分を整理し、興国寺燈籠焼きに関わる3つの寺院と3つの地区について述べる。そのうえで、担い手を「運営者」、「実行者」、「関与者」という要素に分けて考える。第2章では興国寺燈籠焼きの概要を述べる。文献調査に基づいて行事の内容を確認した後、現地調査に基づいて行事の実態を記録する。その上で過去からの変化を考える。第3章では興国寺燈籠焼きへの人々の関わり方を記述する。地区や立場の異なる4名への聞き取りを基に浮かび上がってきた「継ぐ」、「担う」、「拜む」、「吊う」という4つの関わり方を示す。

このテーマは和歌山県の民俗調査の進展という意義を持つ。今までの興国寺燈籠焼きの調査は行事の概要や内容が中心であり、携わる人々の声は取り上げられなかった。そこで社会の変化に伴って行事も形を変えつつある現在において立場の異

なる人々の生の声を収集し、学術的な先行研究がほとんどない興国寺燈籠焼き研究をさらに深めたい。

## 先行研究

筆者が探した中で興国寺燈籠焼きに関する最も古い記述は『和歌山県日高郡誌』の中の一節であった。

由良開山の盆會及び盆踊も古來世に聞え、晩涼に乗じて近郷より往き見るもの少からず里人の談に云ふ、「盆の一月ばかり前に、門前・中・畑三大字の若衆が附近の山から羊歯を刈て来つて寺の門前へ乾す。それはなかなか、澤山な羊歯である。羊歯が乾くと若衆達が寄つて大き抱位長さ三四間の棒を拵へ、盆の十五日の夜、此の羊歯の棒の両端へ火をつけて寺内で練る。又、門前其の他の字で仏事のあつた家から(昔は各戸悉くであつたといふ)燈籠一張づゝ寺の門へ上げる。それが、またなかなか澤山である。寺からも法燈国師へ上げる爲に大燈籠を出す。出揃つたところで、寺の大燈籠を先登に燈籠行列をやる、其の美觀たとへやうもない。それから前の羊歯の棒を無常堂の前で燃やすとき、燈籠の列も此處へ来て、其の火で燈籠を焼いてしまふそれが済むと今度は盆踊に移り、また一しきり賑ふのであるが、今はそれがないので淋しい<sup>1)</sup>。」盆踊の禁絶 尚全く絶えたりとも云ふべからず<sup>2)</sup>。は近年のことなるが、旧藩時代にも多少の取締は之有りしと見え、「盆に踊るとて笠まで買つて、兄貴庄屋して踊られん」の歌も遺れり [和歌山県日高郡役所 1923 : p.1362]。

これは興国寺燈籠焼きを個別に取り上げていたわけではないが、第8編民俗誌で年中行事7月の部分で挙げられていたものである。

興国寺燈籠焼きに関する学術的な先行研究は見当たらなかったが、昭和37(1962)年に県の無形文化財に指定されたときの調査がある。『和歌山県

文化財調査報告書(八)』には委員・田中によって昭和35(1960)年8月15日に調査された報告が記載されており、由来、内容(六斎念仏、松明踊り、大松明、燈籠焼)について触れられている。価値評定としては「このように興国寺の燈籠焼の行事は仏教芸能の保存の見地から無形文化財として指定価値は多いものと思う。今に消滅せんとしている郷土芸能の一つであるから指定を行い永く保存維持したいものである」と述べられた〔和歌山県1974: pp.210-217〕。この調査は行事の概要の記録に留まっており、仏教芸能・郷土芸能的な部分のみが注目された。そこで、筆者は興国寺燈籠焼きの他の重要な要素である火祭りの部分や本来の盆行事的な部分にも着目し、聞き取り調査による生の声も踏まえてこの行事を捉えなおす必要があると考える。

由良町教育委員会発行の『由良の文化財』には平成元(1989)年の大野、平成12(2000)年の川端の興国寺燈籠焼きに関する論考がある。大野の「法燈国師と天狗と火祭」においては、法燈国師を軸に興国寺燈籠焼きが全国の寺社の火祭りや天狗伝説との関係のなかで述べられている。この中では興国寺の歴史および中世仏教史において重要な役割を果たした法燈国師が中心となっているが、盆行事および火祭り一般に広げて新たに興国寺燈籠焼きと比較・考察してみたい。川端の「興国寺燈籠焼き：県指定無形民俗文化財を支える人々」では土俑作りと興国寺燈籠焼きの様子が写真と共に紹介されている。当時の様子の記録と現在の比較を行い、この約20年間での変化を探りたい。

## 調査方法

調査方法は文献調査、参与観察、聞き取り調査である。

文献調査では興国寺の燈籠焼きに関する学術的な研究はほとんどなかった。そこで主に町誌や由良町教育委員会が発行した『由良町の文化財』など郷土資料を参照した。

参与観察は平成27(2015)年、平成29(2017)年、平成30(2018)年に行った。8月15日の興国

寺燈籠焼きには3年とも参加し、平成30年の調査のみ8月13日から15日午前中までの準備期間にも参加した。

聞き取り調査は①門前地区の区長の男性、②興国寺燈籠焼きの参加者である門前地区の男性、③畑地区の女性、④燈籠造りをしている畑地区の男性に行った。聞き取りを行った日時や対象の在住区、性別・年齢、役職、補足事項は表1の通りである。

	日時	地区	性別・年齢	役職	補足事項
①	2018.2.21	門前	男性・60代前半	区長	六斎念仏衆に入っている
②	2018.9.27	門前	男性・30代前半		土俑を担いだ
③	2018.4.29	畑	女性・80代前半		畑地区での生まれ育ち 筆者の祖母
④	2018.8.15	畑	男性・80代前半		切子燈籠を作っている

表1 聞き取り調査の日時と対象の詳細(筆者作成)

インフォーマントの情報は第3章で詳述する。

## 1 調査地の概要

第1章では調査地の概要を記述する。第1節では調査地である由良町と地区ごとの寺院の繋がりを見る。それから第2節では興国寺燈籠焼きに関わる門前地区の興国寺、畑地区の長谷寺、中地区

の東泉寺について説明し、第3節で興国寺燈籠焼きに携わる門前地区、畑地区、中地区とその担い手について整理する。

## 1.1 由良町の概要

本節では、調査地である由良町と、それぞれの地区と寺院について整理する。

由良町は和歌山県の中部、日高郡の北西部に位置する町である。北から北東にかけて有田郡広川町、南から南東にかけて日高郡日高町にそれぞれ接しており、西は紀伊水道に面している。人口は2018年11月現在で5806人である<sup>3</sup>。

町内は①畑②中③門前④里⑤南⑥横浜⑦阿戸⑧網代⑨江ノ駒⑩吹井⑪糸谷⑫柳原⑬黒田⑭神谷⑮大引⑯小引⑰戸津井⑱衣奈⑲三尾川の19の地区に分かれており、それぞれの区の中で班や組としてさらに細分化される。ほとんどの地区に寺院があり、その地区はその寺院の檀家であることが多い。

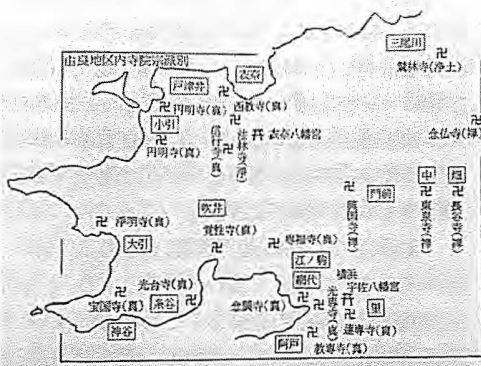


図1 由良町の地区と寺院の分布 [由良町社会科教育委員会 1991 : p.103]

由良町の寺院は17あり、浄土真宗寺院が12、西山浄土真宗寺院が2、そして臨済宗寺院が3ある。図2では浄土真宗寺院が「(真)」,西山浄土真宗寺院が「(浄土)」あるいは「(浄)」,臨済宗寺院が「(禅)」と表されている [由良町社会科教育委員会 1991 : p.103]。

興国寺燈籠焼きを行うのは臨済宗である3つの寺院である。③門前の興国寺とその檀家が中心となって行い、その興国寺の末寺である①畑の長谷寺、②中の東泉寺の檀家も参加する。

## 1.2 関係寺院の概要

本節では興国寺燈籠焼きに関わる興国寺、長谷寺、東専寺の3つの寺院について整理する。

興国寺のおこりは鎌倉時代初期に3代将軍実朝とその母・政子の菩提を弔うことを目的に、実朝の近習・葛山五郎藤原景色倫(願性)が建立した西方寺である。後に無本覚心(心地房覚心)が正嘉2(1258)年、願性に請われて西方寺の開山となった<sup>4</sup>。覚心は永仁6(1298)年10月13日に遷化し、没後、亀山上皇から法燈禪師号が送られ、門派が法燈派と称されるようになった。その後、秀吉の紀州攻めによって焼かれ、江戸期藩主によって再興した。明治維新の寺社地引き上げのなかで独立本山運動を続けるが、明治20(1888)年に妙心寺派末に編入される。戦後、昭和31(1956)年には法燈派本山となるが、昭和60(1985)年に妙心寺派に復帰した [興国寺 2000 : p.22-26]。

興国寺の末寺として同町の畑地区に長谷寺が、中地区に東泉寺がある。畑地区の珠石山長谷寺に関しては次のような由来がある。正応4(1291)年3月19日、西方寺で説法をしていると、突然雷を伴って音と光を出しながら畑村箕谷に宝珠が落ちた。紀伊国造淑文の「雨珠記」によると、法燈国師に菩薩戒を授けられた竜女が報謝の意味で降させたものであると記述されている。翌年、大和国長谷寺別院より十一面観世音小像を勧請して本尊と伽藍一字を建立し、珠石山長谷寺としたという [大野 1990 : p.47]。

中地区の靈巖山東泉寺はもと西山浄土宗の寺院で、原右衛門太夫(当初三郎太夫)が天正から慶長(1573-1615)の頃に建立したと伝えられる。その後、臨済宗である三尾川の鷲林寺と交換して臨済宗に改宗した。改宗の詳しい記録はないが、鷲林寺の記録によると開基は法燈国師であり、3代まで「禪師」の戒名がついていること、地藏菩薩

像の台座に享保5(1720)年に寄進した六斎講中の文字や安永8年(1779)年の「南無阿彌陀仏」の銘号碑に念仏講中の文字が見られることから、臨濟宗の檀家が多い門前、畑、中地区で盛んであった六斎念仏講が三尾川地区にもあったといえる。そして三尾川地区にも臨濟宗の寺院があり、その後西山浄土宗に変更したことが分かる。西山浄土宗としての鷲林寺の中高開山は印空適伝であり、寺院の交換は適伝が還俗した正年間以前と推測されている[由良町史編集委員会1991:p.543]。

### 1.3 関係地区と関係者の概要

本節では興国寺燈籠焼きに関係する地区と行事の担い手についてまとめる。内容は、平成30年8月13日に松明踊りの練習を見学した際、練習場に来ていた興国寺の総代5~6名のグループと、松明踊りに参加する子供の保護者としてその場にいた女性4、5名のグループから聞いた話に基づく。

行事に参加するのは門前地区の興国寺の檀家と、その末寺である畑地区の長谷寺・中地区の東泉寺の檀家である。由良町では地区ごとにおおよそ檀家寺が決まっているため、興国寺燈籠焼きに参加する地区は主に門前地区、畑・中地区であるといえる。

門前地区は興国寺の周辺に位置する地区である。内台(内在)、伊賀田、山崎、清治、佃の5つの班から成るが、檀家数にばらつきがあるため、興国寺燈籠焼きの際には山崎、清治、伊賀田、内台(内在)という4つの組に分かれる<sup>5</sup>。門前地区の興国寺檀家の人々は行事当日の朝から土桶を作り、行事本番で土桶担ぎを行う。土桶に関しては準備・当日ともそれぞれの組ごとに行っており、組同士の横の交流はあまりないようである。前日にそれぞれの班で別々の場所で土桶を作り、興国寺燈籠焼き当日は自分たちがつくったそれぞれ同じ組の男性たちで協力しながら担ぐ。聞き取りによると土桶の準備や本番に携わるのは男性のみであるが、松明踊りに出る子供がいる家では主に母親が練習・本番の送り迎えや衣装の準備などを担当しており、女性も間接的に行事に関わっている<sup>6</sup>。

また、引越しや分家が理由で興国寺檀家は里地区や横浜地区、町外にも存在するため、行事の運営を行う興国寺総代は6人中4人が門前地区、残りの2人が里・横浜地区から選ばれる。聞き取りによると、興国寺の檀家の中からは2年任期、1年ごとの半数改選で総代が選ばれ、興国寺と協力して興国寺燈籠焼きをはじめとする寺の行事を運営する<sup>7</sup>。

畑地区は由良町の東端に位置する地区であり、中地区は畑地区と門前地区の間に位置する。畑・中地区の檀家の家々は年忌の年に切子燈籠や提灯を用意し、8月15日の夜に興国寺燈籠焼きの最後に燈籠を火に投げ入れて火送りをする。また、畑・中地区の小学生の男子は門前地区の小学生男子と共に松明踊りをする。畑・中地区の小学生男子が松明踊りに参加するようになったのは2015年前後のことであり、衣装などは門前地区で用意するという。

これらはいずれも担い手といえるが、関わり方によっていくつかの要素に分かれる。筆者はそれを「運営者」、「実行者」、「関与者」の3つの要素として捉えた。「運営者」は行事の流れを見守り、スムーズにできるように気を配る要素である。興国寺檀家がそれにあたる。具体的には、無常堂の広場にロープを張って交通整理を行う。また、行事が始まると開山燈籠と呼ばれる興国寺の大きな切子燈籠を中の火が消えないように運び、最後の燈籠焼きで火に投げ入れる<sup>8</sup>。

「実行者」は興国寺燈籠焼きを進めるにあたって準備や進行に大きく関わる要素とする。門前地区の興国寺檀家の男性たちがそれにあたり、1つの地区でも山崎、清治、伊賀田、内台(内在)の4つの班に分かれる。「実行者」は興国寺燈籠焼きの見せ場の一つである土桶に関わる。前もって門前地区で用意したオニシダを使って行事当日の朝から土桶を作り、行事本番ではそれを担いでパフォーマンスを行うのである。

「関与者」は興国寺燈籠焼きに何らかの形で参加する要素であり、さらに役割の有無によって区別できる。「役割のある関与者」は、六斎念仏を唱える門前地区の念仏衆の人々や松明踊りをする興

国寺檀家および畑・中地区の小学生男子、燈籠焼きに必要な道具である切子燈籠を作る人たちなどである。彼らは実行者のような関わり方ではないが、興国寺燈籠焼きの進行や実行において、なんらかの役割を担っている。一方で「役割の無い関与者」は、年忌に当たった興国寺檀家および長谷寺・東専寺の檀家の人々である。興国寺燈籠焼きの4つの内、六斎念仏、松明踊り、土俑には関わらないが、最後の燈籠焼きには参加する。これらを図に表したものが図2である。

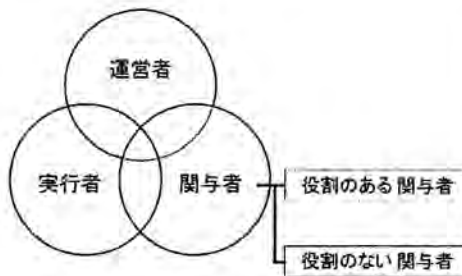


図2 興国寺燈籠焼きの担い手の3要素

これらの要素は必ずしも1つに留まる訳ではなく、複数の要素にまたがることもある。例えば「役割のある関与者」でありつつ、「役割のない関与者」である場合である。具体的には、燈籠焼きに必要な切子燈籠を作る職人でありながら、自分の家も年忌に当たっていて行事当日の燈籠焼きに参加する人などである。

以上、第1章では調査地の概要をまとめた。第1節で調査地である由良町の地区と宗教的な区分について見た後、第2節では興国寺燈籠焼きに関係する興国寺、長谷寺・東専寺の3つの寺院の歴史を説明した。第3節では興国寺燈籠焼きの担い手である興国寺檀家の門前地区、長谷寺檀家の畑地区・東専寺檀家の中地区について述べたうえで、それぞれの檀家や地区による行事への関わり方の違いを述べた。これらを通して行事の担い手に複数の要素があることを指摘した。

## 2 興国寺燈籠焼きの概要

本節では県の無形民俗文化財に登録された際の記録の文献調査を基に、聞き取りによる情報も加えて興国寺燈籠焼きの内容を述べる。

### 2.1 行事の内容

興国寺燈籠焼きは孟蘭盆会の精霊送りとして現在は新暦8月15日に行われており、六斎念仏、松明踊り、大松明(土俑)、燈籠焼きの4つで構成されている。昭和35年の調査を経て、昭和37年2月13日に県指定無形民俗文化財に登録された。

#### 〔六斎念仏〕

「開山念仏」といわれ、融通大念仏の高野山系統を汲むものであるという。六斎念仏衆は着物に角帯を締め羽織を着て袈裟をかけた左手に鉦をもって数珠を右手に檀木をもって叩きながら、4斎の曲譜を1時間ほど唱える。このときに尺八が奏でられる〔和歌山県1974:p.213〕。

六斎とは六斎日の略で、特に身を慎み持戒清浄であるべき日と定められた6か日であり、一般に8日・14日・15日・23日・29日・30日をいう。六斎念仏は念仏踊りの一つで鉦を叩き念仏を唱和するもので、元は六斎日に念仏をしたものであると考えられるが、後には一定の日や葬式などに行われるようになった。町内の門前地区に六斎念仏講があるが、かつては畑地区にも六斎念仏が残されており、これらは法燈国師が高野山で広めた「萱堂念仏」であるといわれている<sup>9</sup>〔由良町史編集委員会1991:p.1087〕。

#### 〔松明踊り〕

松明踊りは「火振りおどり」ともいい、門前地区の少年が無常堂前の広場で松明火を中心に周辺を円形にして踊るものである。両手に松明を持ち、合掌のように捧げて念仏、鉦、太鼓のリズムに合わせて踊り進む。この踊りは一同飛躍旋回する古い形式で大念仏の方が残されているという〔和歌

山県 1974 : p.215]。興国寺燈籠焼きの松明踊りも六斎念仏踊りといわれている [由良町史編集委員会 1991 : p.1087]。

なお、松明踊りの指導者によると松明踊りに参加するのは小学4年生から小学6年生の門前区と畑・中区の男子である。従来は門前区の男子のみが参加していたが、少子化のため子供の数が足りず、2、3年前から子供クラブの活動の一環として畑・中区の男子も参加するようになった。

#### 〔大松明(土俑)〕

大松明は土俑ともいわれ、大量のオニシダの葉を棒状に集めて割いた竹で周りを巻いて固定したものである。「土俑」は大松明そのものを指す場合と土俑を担ぐ事を指す場合があり、後者は「土俑担ぎ」と呼ばれることもある。

土俑は長さ4m20cm、重さ約150kg、直径約1メートルである。7日に山にシダを刈りに行きこれを乾燥しておき、15日の朝から4つの各組でそれぞれ1本ずつ作られる。作る場所や作る手順は組ごとに少し異なる。

興国寺燈籠焼きで松明踊りが終わると門前地区の男性たちが土俑を担いで様々な技を披露する。この土俑担ぎには、「かたげ出し」、「釜廻り」、「線香立て」、「拝み合わせ」、「俵返し」、「いづつ積み」がある。「かたげ出し(担ぎ出し)」は門の前に運んだ土俑を無常堂まで運んでいくことである<sup>16</sup>。昔は一人で担いでいったが、現在は皆で担ぐことになっている。それから土俑の両端に火をつける。「釜廻り」は両端に火のついた土俑を門前区のそれぞれの組の代表の青年が一人で担ぎ、釜場を3周回る。途中で落とすとまた元の位置に戻ってやり直しになる。4本の土俑が釜廻りを終わらせると、土俑を釜場の所定の位置に立てる「線香立(一本立)」がある。これは仏に線香を供える意味があるという。「拝み合わせ」は2本1組の土俑を両方から立てかける。仏に手を合わせて拝む姿を現しているという。その後、土俑を前に投げる「俵返し」がある。最後の「いづつ積み」は4つの土俑を井桁に組み合わせる。いづつ積みが終わると土俑が本格的に燃え出す [和歌山県 1974 : p.215-216]。

土俑作り、土俑担ぎは先祖供養の一つであると共に、隣近所の連帯感を築く場、力自慢を競う場であり、「成人」としての証を立てる的に発展してきた門前地区の民衆の生活と密着した行事である [川端 2000 : p.21]。

#### 〔燈籠焼き〕

燈籠焼きは土俑が燃える中に、各家が用意した切子燈籠を投げ入れるものである。最初に興国寺の高燈籠が投げ入れられ、続いて檀家の燈籠が次々と投げ入れられる。切子燈籠は木の枠に家紋や模様を切り抜いた和紙「南無阿彌陀仏」という文言を切り抜いた紙を張ったものである。初盆の燈籠は白一色、それ以降の燈籠には白に加えて青や紫などの色紙が使われる。

燈籠焼きは盆行事の祖先祭祀としての送り火であるとともに、虫送りによる豊作祈願の行事でもある [川端 2000 : p.21]。また大野は興国寺燈籠焼きについて以下の様に指摘する。

天狗=山伏、熊野と山伏。法燈派の拠点が熊野、南朝と山伏、三光国師(孤峰覚明)と後醍醐天皇との関係、虚無僧の元祖が楠正成の孫・正勝であることから、法燈国師および法燈派と天狗(山伏)の深い関わりが伺える。そして修験道に火祭りが関わることが多い中で、法燈国師と天狗と火祭りが関係深いものになっていったと思われる [大野 1989 : p.73]。

大野の言説によると、興国寺火祭りは修験道の影響が大きいといえる。なお天狗に関して、『新著聞集』には、興国寺が何度も火災にあったという逸話がある。ある日ひとりの僧が来て、火災の原因は「開山法燈国師の文字、水去りて火登る」と書くためであり、自分が寺を建てようと申し出た。この僧の正体は上州(栃木県)赤城山の杉の坊という天狗であった。約束の時に住持は里に下り、里人に暮れから火を消し、静かにするように言い含めた。その晩建物を建てる音がし、夜明けには七堂伽藍が建てられたという [中津編 1985 :

p.337-338]。

さらに、興国寺燈籠焼きに火伏せの意味を持たせる言説もある。昭和40(1965)年7月1日発行の『公民館報ゆら』2面「てんぐの力餅」では上記の逸話に続きのエピソードが追加されている。杉の坊が来て七堂伽藍が再建された後も火事が起こり、護摩堂以外が焼けてしまった。そこに再び杉の坊がやって来て、「護摩堂四角の柱をかたどった目方百貫匁のドヨウ(おにしだをかずらで巻く)タイマツを四本こしらえて、それを一本づつ青年男子にかつがして広場を三回まわって井ゲタに組むと火が去り水を呼ぶの意を表すから、灯ろう精霊のおくり火と共にたいまつ踊りの火祭をしてください。それから住持様ドヨウをかつぎ出る若い衆に天ぐの力餅を一つづつ渡してあげてください。(中略)この餅をたべると元気百倍力がモリモリとわいてドヨウを軽々とかつぐ事が出来ますからこの行事を毎年旧七月十五日に続けてください。そうするとお寺は火災からのがれます」と住職に告げた。それから現在の興国寺燈籠焼きが行われるようになったという[由良町中央公民館, 由良町編1981]。この話は出典が明記されておらず、創作の可能性が高いが、この記事の書き手は逸話と絡めて興国寺燈籠焼きに火伏の意味合いを持たせている<sup>11)</sup>。

## 2.2 行事の準備

本節では平成30年の参与観察を中心に興国寺燈籠焼きの準備についてまとめる。今回は六斎念仏の準備は見学しなかったため、文献調査の記録を基に記述する。

興国寺燈籠焼きの前に、六斎念仏、松明踊りの練習や土俑作りが行われる。担い手は門前区の人々である。それぞれの準備は以下の通りである。

### [六斎念仏]

六斎念仏は14日と15日に行われる。7日盆から13日まで念仏練習を行う。14日には宿(念仏頭の家)、伊賀田墓地、伏拝さん(伏拝地藏の祠)、無常堂墓地、無常堂墓地の奥、浪人墓(興国寺境

内の檀家墓地)、無縁さん(興国寺境内の無縁墓地)で念仏を唱える。念仏は午前中には終わるという。その後、新盆の家で念仏を唱える。15日には17時ごろから六斎念仏が唱えられる[石塚2017:p.291-311]。

### [松明踊り]

松明踊りの練習は8月13日と14日の夜に門前区のコミュニティセンターで19時30分から行われた。最終日の14日に松明に火をつけて練習する。今年参加した子供たちは11人で、うち門前地区が6人、畑・中区が5人であった。指導者以外にも興国寺の総代をはじめ、地区の人々が様子を覗きに来ていた。松明踊りの松明は長さ80cmほどの竹に松でつくった芯をさして作る。練習用は去年の竹で茶色くなったもので、本番は青竹を使用する。

### [大松明]

大松明は8月15日の朝から門前区の4つの組でそれぞれ別々の場所で作られる。今回は清治の大松明づくりを見学した。その場にいたのは最初16人ほどであったが、途中で消防団や六斎念仏の都合で抜けたり、笹を山へ刈りにいったりして人数が増減した。当日の流れは以下のとおりである。

6:30 集合

7:00 すぎ 作業はじめ

8:30 すぎ 休憩

休憩後に笹をさしていく

9:00-9:45 すぎ 踏み固め

10:15 すぎ 終了

大松明作りのおおまかな手順は次のようであった。

(1)竹を半分に割り、さらに半分に割って4等分にする。ノコギリの刃を当てて木で叩いて割って行き、後は足で押さえながら手で割っていく。割った竹はナタの背で節を飛ばす。

(2)地面に縄を12本引く。竹6本を置き、足で踏んで竹を曲げていく。

- (3)オニシダを竹に対して垂直に乗せていく<sup>13</sup>。シダの茎を差し入れながら勢いよく突っ込む。
- (4)芯として丸のままの竹を2本乗せる。
- (5)版締めをする。真ん中から端に向かってシダを縄で締め、竹で結んでぐるぐるねじって先をシダに差し込む。調整のためにシダを足した後、持ち上げて縄で締める。
- (6)上のあたりに笹の葉を挿し、ひっくり返して下側にも笹を挿す。はみでたシダの部分切る。
- (7)本締め(ホンチャン)をする。縄で笹ごと結ぶ。木の棒で長さを測った後、上や横から3回ほど踏みしめる。縄や竹でさらに結んで固定し、棒について笹を入れていく。

土俑作りは各組で別々の場所で作り、完成すると軽トラックに乗せて興国寺まで運んでいく。見学をしていると、縄が切れたり、大松明が折れたりするというトラブルもあった。力の加減やシダを積む量や場所のバランスなど、実際にやって調整していかなければならないことが多い。話を聞くと、一年に一回のことなので忘れていたため、思い出しながら作るのだという。シダを均等に組んでいかなければならないが場所によって量が違ったり、斜めに歪んで真っすぐ作れなかったりして難しいとのことであった。特にシダの量は押した時に減ってしまうので分かりにくい。昔は中学生たちが笹刈りを担当し、大人が作るというように分担されており、子供のときから親がやるのを見て育ってきたという。今の参加者は若くて高校生で、子供たちは参加しない。松明作りは慣れない作業で重労働であり、作業をしていると暑くなるし、シダや笹でチクチクと痒くなってしまうとのことであった。

### 2.3 行事の流れ

本節では平成30年の参与観察を基に、興国寺燈籠焼き当日の流れをまとめる。なお、本論文では興国寺燈籠焼きの盆行事的な面、火祭的な面に着目したため、六斎念仏は見学しなかった。

- 20:00 檀家の人が集まり始める
- 20:55 尺八の音色が流れる
- 21:00 僧によって経が唱えられる  
総代は法堂に向かって左に待機している
- 21:05 開山燈籠を用意する
- 21:10 開山燈籠に火をつける
- 21:13 開山燈籠を持った総代と切子燈籠を持った檀家たちが、鉦と太鼓のリズムに合わせて本堂の周りを回り始める
- 21:30 無常堂に向かって本堂から降り始める
- 21:50 無常堂に到着  
松明踊り
- 22:00 土俑釜周り
- 22:25 線香立て
- 22:30 拝み合わせ
- 22:32 俵返し
- 22:38 井桁
- 22:40 燈籠焼き
- 22:50 終了

興国寺燈籠焼きの会場は2か所あり、門をくぐって坂と階段を上ったところにある本堂から、大門から坂を下っていったところにある無常堂と釜場に移動する。

最初の会場は本堂である。夕方の六斎念仏が終わった後、20時頃から檀家が集まり始め、21時ごろから読経が始まる。読経に合わせて切子燈籠を持った檀家の人々が本堂を3周回る。この際に尺八が演奏される。吹いている人は7人であり、経が始まる前は笠をかぶらずに吹き、読経の後に笠をかぶっていた。燈籠が本堂を回るときは、鉦3人、念仏を唱える人が3人、灯りを持った僧、開山燈籠、尺八7人、念仏を唱える僧が3人、檀家燈籠、鉦を叩く僧という順番で人々が並んでいた。今年は檀家の燈籠が30個強ほどあった。

それから次の会場である無常堂と釜場に移動する。無常堂では松明踊り、土俑、燈籠焼きの間に興国寺燈籠焼きを説明するアナウンスが流れる。アナウンスではこの行事が鎌倉時代から始まったとされるということ、送り火であると共に虫送りの念仏で実りの秋の豊作を祈願していること、大

松明は成人儀礼のひとつであることが述べられていた。松明踊りの際は総代3人が火の守りをしていった。土桶担ぎの際はそれぞれの組の人々がうちわを叩いて音で方向を示して大松明の担ぎ手を誘導したり、火が燃えすぎたらバケツに入れた水をかけて調節したりして、パフォーマンスが円滑に進むように工夫をしていた。今年は15日の午前中から雨が降ったために土桶が濡れてしまい、水を含んだ大松明は重さを増して例年より担ぎづらかったうえ、あまりよく燃えなかったためにクライマックスの燈籠焼きの際に開山燈籠になかなか火がつかなかった。

今年の興国寺燈籠焼きには関係者以外の人も来ていた。外国人の女の子が数人見学に来ていたので声をかけたところ、由良町の近くに位置する湯浅町に研修に来ているとのことで、受け入れ先の男性が日本の伝統的な行事を見せたいと思って連れてきたということであった。この男性は由良町出身ではなく、興国寺燈籠焼きを見に来たのも初めてだという。神社仏閣めぐりが好きで興国寺燈籠焼きのことを知っており、見学に来たかたと語ってくれた。また、檀家の切子燈籠の行列や松明踊り、土桶担ぎ、燈籠焼きの写真を撮影するためのカメラマンたちが20人以上来ていた。カメラマンはプロ、アマ問わずであり、平成27年、平成29年の参与観察のときも見られた。

## 2.4 行事の変化

本節ではそれぞれの文献資料の記録と現状を比較し、聞き取りによる話も踏まえて行事の変化をまとめる。

文献調査からは、開催日、時間帯、盆踊りの有無、土桶の重さ、松明踊りの参加年齢層の変化が見て取れた。戦前に編集された『和歌山県日高郡誌』の記録には「(前略)それが済むと今度は盆踊りに移り、また一しきり賑ふのであるが、今はそれがないので淋しい。」[和歌山県日高郡役所 1923: p.1362]という記述があることから、かつては盆踊りがあったことが示唆されている。「盆の一月ばかり前に、門前・中・畑三大字の若衆が附近の山か

ら羊歯を刈て来つて寺の門前へ乾す」[同上: p.1362]という記述を見ると土桶作りの分担が現在とは異なっているが、4本の土桶が門前の4班と対応していることから畑・中の参加は想像しにくい。また、六斎念仏や松明踊りについて触れられていないといった特徴があるが、これは興国寺燈籠焼きに焦点を当てたものではないため、この記録から当時は六斎念仏や松明踊りがなかったとはいえないと筆者は考える。

県の無形民俗文化財に指定された際の昭和35年の調査では、18時から六斎念仏が始まり、19時ごろに檀家たちが集まって22時に本堂の周りを回り始め、翌日の1時ごろに行事が終わると書かれている。また土桶の長さは3m90cm、重さは263kgから300kgだと記録されている。さらに松明踊りに参加するのは門前区の青年や少年15歳から20歳前後の20人～30人であったと述べられている[和歌山県 1974: p.213-216]。当時は現在よりも開始時刻が早く、終了時刻も遅く、所要時間が長かったと考えられる。土桶は現在の約150kgの倍ほどあったようである。松明踊りに参加するのは15歳から20歳と書かれており、現在より年齢層が高い。

昭和54年に出版された書籍に掲載されている田中の記録によると、18時から六斎念仏が行われ、19時に檀家の人々が集まって22時ごろから本堂の周囲を回り、翌日1時ごろに行事が終わるとされている。土桶は長さ3m90cm、周り2m70cm、重さ300kgであった。松明踊りは20人によって行われるとある[田中 1979: p.363]。この記録は実際に田中が調査を行ったのか文献調査のみでまとめたのかは定かではなく、実際に調査をしたのなら何年に調査したのかが明記されていないため、あまり参考にはならない。

由良町誌によると、昭和58(1983)年までは旧暦7月15日に行われており、20時ごろから檀家が集まってきていた。法要は22時に終わり、全体の終了は22時30分ごろである。檀家の燈籠は約100基で、梵天と袴をつけると2～3mになるという。昭和35年ごろまで臨時列車があった[由良町史編集委員会 1991: p.979]。「池の土手の斜面と広

場が3000人から5000人の観衆でいっぱいになる。切子灯籠を持った人たちが散らばって幽玄の世界を呈する[同上:p.801]という記述もあった。松明踊りは小・中・高校生ぐらいの門前地区の少年たちが参加し、大松明は長さ約4m、周り約3m、重さ200kgであり、10年ぐらい前までは300kgあったと書かれている[同上:p.801]。町誌がまとめられたころには重さが減少しており、当時の10年前である昭和56(1981)年前後までは300kg前後あったと推測される。この記録でも松明踊りに参加するのは小・中・高校生と書かれている。

川端の平成12年の記録には土俑作りの過程が詳しく記述されている。当時の土俑は平均して長さ4m20cm、直径は真ん中が70cm、両端が1m、重さ約150kgであったようである。長さは興国寺の参道の拭き石の幅に合わされていて昔からあまり変わっていない。シダの減少が記述されており、その原因は山畑の開墾や道を削った道路の拡張などによって自然のままの山がすくなくなったためと考えられると書かれている[川端2000:p.15]。

次に、聞き取り調査からは、出店の有無、開山灯籠の焼き方、土俑作り、松明踊りの参加者、来訪者、切子灯籠に関する変化がわかった。第3章の現地調査で行った聞き取りによると、興国寺は法燈派から妙心寺派になる前までは出店がたくさん出ていること、総代たちは灯籠焼きの際に開山灯籠をすぐ火に投げ込まずに少し焦らしてパフォーマンスを出していること、松明作りは子供も手伝っていたが現在は大人だけで作ること、松明踊りは門前地区の子供たちだけでなく畑・中地区の子供たちが参加するようになったことがわかった。後述する第4章の聞き取りからは、昔は臨時列車があって他地域からも見物客が大勢来ていたが現在はカメラマンが多く来ていること、切子灯籠はもともと家で作っていたが現在は作り手に頼んで作ってもらうことがわかった。

以上の変化をまとめると表2のようになる。

過去の記録		2018年現在
旧盆の夜(1981年まで)	開催日	新盆(8月15日)の夜
	時間帯	20時ごろから集まる 23時ごろに終了
あり(1923年以前)	盆踊りの有無	なし
300kg(1960年の調査, 1981年頃まで) 200kg(1991年の町誌の記載) 150kg	土俑の重さ	約150kg
15~20歳 小・中・高校生	松明踊りの年齢層	小学4年生から6年生
あり(1985年の宗派変更まで)	出店の有無	ほとんどなし
特に工夫はない	開山灯籠の焼き方	パフォーマンス性を加える (2015年前後から)
中学生が笹を刈り、大人たちが大松明を作る	土俑作り	笹刈りも松明づくりも大人が行う
門前地区の子供のみ	松明踊りの参加者	門前地区と畑・中地区の子供 (2015年頃から)
他地域からの見物客 (1960年まで臨時列車あり)	来訪者	カメラマン
各家で作る	切子灯籠	人に頼んで有償で作ってもらう

表2 興国寺灯籠焼きの変化(筆者作成)

このことから行事の内容自体に変わりはなくとも、運営面や環境面で様々な変化があることが分かる。聞き取りの中では昔は活気があった、大人も子供も楽しんでたという話が複数人から出たが、それは出店の影響が大きいと考えられる。1960年頃までは臨時列車が出たという記録があったが、臨時列車がなくなった理由や他地域からの来訪者が減少した理由を示した資料は見つけることができなかった。

以上、第2章では興国寺燈籠焼きの概要を述べた。第1節では興国寺燈籠焼きを構成する4つの要素である六斎念仏、松明踊り、土桶、燈籠焼きの内容を整理した。第2節では行事の準備を、第3節では行事当日の様子を平成30年の現地調査を基に記録した。第4節では文献調査や聞き取りを踏まえて行事の過去からの変化を探った。これらを通じて興国寺燈籠焼きそのものの内容を明らかにした。

### 3 興国寺燈籠焼きへの関わり方

第3章では聞き取り調査を基にした興国寺燈籠焼きへの人々の関わり方を考察する。門前地区の区長の男性、興国寺燈籠焼きの参加者である門前地区の男性、畑地区の女性、燈籠造りをしている畑地区の男性という年齢、性別、居住地区、立場の異なる4名の人々に聞き取りを行ったところ、それぞれの話から「継ぐ」、「担う」、「拜む」、「弔う」というキーワードが浮かび上がってきた。そこでこれらの行為に関するキーワードを基に、4名の興国寺燈籠焼きへの関わり方を考察する。

#### 3.1 継ぐ

本節では門前区長の岡紀之さん(61歳)の話を書き記す。筆者は興国寺燈籠焼きを調べるために興国寺に連絡をしたところ、郷土史家の大野治さんを紹介していただいた。大野さんには数回話を伺い、大野さんの紹介で門前区長であ

る岡さんにお話を聞くことができた。聞き取り日時は2018年2月21日14時から15時30分である。

岡さんは門前地区の区長という立場もあってか、継承や課題について当事者意識が強く、力を入れて話してくれた<sup>13</sup>。岡さんは和歌山市内のノーリツ鋼機で技術職として勤めた後、定年後は担い手が減少している六斎念仏の継承のために六斎念仏を唱える念仏衆に加入した。

「どういう行事でも、その時代時代で合ったやり方はどんどん変化していくのが現状じゃないかな。変化していかざるを得ない。それが後ろ向きになったらやめる、前向きになったら変化して続けていく。前向きに捉えていった方が、やっぱりその地区その地区の文化なんで、昔からの文化なんで、いいことじゃないかなとは思っているんですけど。でもそれもやっぱり、地区全体で盛り上がるか誰かひとり率先して引っ張る人がいるかにかかってくるんじゃないかな。でないとならやっぱり、どうしても先細りしますよね。すると思う。どうでもよかったら誰か一人が辞めようって声出したら、そうしようってなるんで。まあそうならないように仕向けていかないといかんなど。そして自分の代まではって考えで今はやってるんですけど」

行事の継続には時代の変化に応じた変化が不可欠だと岡さんは言う。しかし行事の基本は変わっていない。それを継承してきて今後も続けていくというのがすごいと伝えたところ、次のような返事が返ってきた。

「それはみんな思ってることやと思います。でないとなら今まで続いてきてない。まあお寺の関係のイベントと、そういうイメージと、続けてきた、続けていくという感覚と、それから例えば岸和田のだんじりとはまたちょっと一線を画して考える必要があるんじゃないか。あれは祭りに参加してて楽しい、好きでやっ

てる、なんかちょっとテレビで見たらあの祭りのために一年かけてやってるとか、絶対仕事休んで帰るとか、好きなんでとってるから、ちょっと我々がやってるイメージとは違うなあ」

この行事は、担い手の愛着や積極性によって続けられてきたとは言えないようである。先祖を送る純粋な盆行事として来ている人は少ないものの、盆の行事ということもあり、お寺関係の祭りのイメージが強い。それでも途絶えることなく続けられてきたのは、昔から続いてきたものをこれからも継承していくという思いによるものであろう。岡さんのお話を踏まえて、燈籠焼きに携わっていて一番大変なのは今後どう伝えていくかであるのかと尋ねた。

「そうですね。……まゝみんな原型を崩したくないとは思ってるんやけども……。まゝ準備から本番まで、ほんとにできなくなってしまうちがうかなと思うこともある。でも裏を返せばなんとかその時代その時代でできるん違うかなというのものもある。その時代に合ったやり方ということで、で、みんなやっぱり、私もそうやけど、燈籠焼きの本意を理解していない。本意っていうのはなんのためにこのお祭りをしてるんかということ。昔から今まで続いている行事ではあるんやけど、その本意はなんやと。先祖の方を送る精霊流しみたいなもんだと。ていうのがあればまた形を変えてもいいんかなという気もあるし。その本意さえ崩さなければ。でもまあなんていうかな、このためにするというのが分かれば、じゃ、その時代その時代で形を変えてもいいんやという考えも十分できるから。ただまゝ唯一できないのは無形民俗文化財であるということだけなので。こういう面は絶対形は崩せないで。というところになるかなと」

今では土傭を担げるような力自慢の人も少なく、主催するお寺の人手も不足している。農業

や林業に携わる人が減ったので、土傭の材料となるシダのそもそもの刈り方から分からない。昔と同じようにすべてをこなせる訳ではないからこそ、続けていくためにできる範囲でやっていくことが大切だという。

聞き取りの中では門前区の中でも興国寺燈籠焼きについて取り組む姿勢が異なるという話もあった。例えば今は4つの組に分かれているが、負担を減らすために組を2つにしないかという案も出たとのことである。また、岡さんは祭りに来る人を増やすために出店を復活させればよいのではないかという考えを持っていた。

### 3.2 担う

本節では門前区の池田喜裕さん(33歳)の話を記述する。池田さんに聞き取りをしたのは、平成30年の土傭担ぎを見たことがきっかけに、実際に行事に参加している若者の話を聞きたいと感じたからである。岡さんのときと同様、大野さんの紹介でお話を伺うことができた。聞き取り日時は平成30年9月27日の13時から13時40分である。

池田さんは生まれ育ちも門前地区であり、専門学校のように由良を出てからまた戻って来た。現在は実家の石材加工店で働いている。小学校の頃から松明踊りに出ていたが、中高のときはなにも出ず、専門学校時代に盆に帰省したらまた手伝いをするようになった。興国寺燈籠焼きの松明担ぎは最初の担当は決まっているが、そのあとはその場のノリで、できそうな人がやるのだという。担ぐのはいきなり最初から重い一番目を担当するのではなく、最後の方の、ずいぶん燃えて軽くなったものから徐々に慣れて行く。池田さん自身は何年間松明を担いでいるかは定かではないが、10年近くは土傭担ぎにずっと出ているという。ここまで話を聞いて、地区の中では池田さんが最年少なのかと尋ねた。

「若い子もいてると思うけど。いてるいてる。

いてると思う。あんま顔ださん子もいてる。やっぱりこう、祭りでも……うーん、出す子と出さん子が決まってるわな、実際。おっても。まゝ檀家じゃないとか檀家だとか、そんなくくりとか出てきたら、やっぱり来にくくなっている面もあるんかな。(中略) 高校生の時は見に行ってもなかった。その間がね、空いてしまつたら、その後ってなかなかね。行きにくくなってくるのか。やっぱ出ていくし、学校ないさけ、ここたい。大阪行ったりするやん。そしたらもう帰ってこない。どこともそんなんやと思うけど。一回出たらやっぱ来にくいし、間空いたら。まだ僕の場合声かけてくれる年上の人おったさけ行くようになったけど」

池田さんの話からは担い手に関する問題点が窺える。まず、松明踊りをする小学生時代から土桶担ぎに携わる青年時代の間である中・高生の時期に祭りとの接点がないこと、そして、声をかけられる人/かけられない人がいることである。この2つの問題点には、進学や就職に伴って地元を離れることが大きく関わっている。地域間の繋がりが疎遠になると、盆の前後に帰省していても地元の人たちの集まりには顔を出しにくいだろう。また「田舎」ならではの近所づきあい、地域の人々との協働に少し距離を置きたいという人もいと考えられる。さらに檀家か否かで参加の有無に区別があるのも盆行事という寺に関係する行事が下敷きになっているからこその特徴である。

筆者が「知り合いや、気にかけてくれる人がいない場にはやはり出ていきづらいですよね」という相槌を打つと

「そうそう。なんか声かけてくれたら行くんやけど。ね。まゝ一回行っても、まあやっぱしゃべる相手もいてないってなるじゃないですか。しょっちゅう行ってりゃそりゃ喋れるけど。いきなり声かけてその年は来ても来年は来んとか。声かけやな来んとかいうのが多いわな」

筆者も松明作りの見学の時、人々の会話の輪に入ることができず、ほぼ黙って写真を撮っているだけになってしまっていた。その経験を話すと

「閉鎖的になってきてるんかな。寂しいけど。」

という言葉が返ってきた。松明づくりといえば、見学時は年配の人が主導権を持っていたように見えたため、私が見学した班とは別の班の池田さんにもその旨も確認をした。

「まゝ教えてもらって感じで。……それだけ若者いてないし。ほんまに。ほんまにない。ぼくらより下っていったらもう数えるほどしかない。5人いてるかっていうくらい。で、間知らんしなぼくら。中・高って知らんやん。呼びたくても。自分らの子供くらいだったらあそこやあそこやって分かるけど。その間ってというのが、難しいな。」

池田さんには小学4年生の子供がおり、今年松明踊りに初めて参加したとのことであった。自分の子供たちの世代ならどの子供がいるかが分かるが、それ以外の世代は顔も住んでいる場所も分からず、声をかけることができないという。

他の組の話聞いても詳細は知らないようであった。大松明を作るのも別の場所で各々作業するため、他の班と喋る機会がないとのことで、他の班への関心もあまりないようであった。このことから同じ区の中でも班と班の中で断絶が起こっているような印象も受けた。それぞれの部分を担当する人々はその部分だけを注視しており、祭りの全体には関心がないと考えられる。門前区の人々は興国寺燈籠焼きの中でも大松明という部分をメインに担っているが、それはあくまでも班の中だけでの協働作業であり、区という単位での協働作業ではないからだと考えられる。

### 3.3 拝む

本節では筆者の祖母である畑地区の栖原宏子さん(81歳)の話を目録する。話を聞いた理由は、栖原さんは81年間ずっと生家にいるため町の様子や住民について詳しいから、また我が家の盆行事や仏事を中心となって取り仕切ってきたからである。調査日時は2018年4月29日20時30分から21時30分であった。

栖原さんは畑地区で生まれ、婿養子を取り、今までずっと生家で暮らしている。81年間この地域にいますが、当時は治安が悪くて親が心配して行かせてくれなかったため、小さい頃の興国寺燈籠焼きの思い出はないという。そこで、興国寺燈籠焼きに関してなにか覚えていることはないか尋ねた。

「昔はほいでいろいろ今みたいに、そう、あの、催しもんはなかつとろ。ほやさかあの開山の燈籠焼きらでもね、よその土地から珍しがってね、あの、12時ごろその開山の燈籠焼きのために臨時列車出たんよ<sup>14</sup>。その時らにもう開山のあの美月荘の上から開山の上までずーっと人波でね、したけど、この頃もう仏事事やらあんなことに関心のない、そんな時代になってきとろ。ほやさかね、燈籠の数も減ってくしな。(中略)ほやさかあんなことでも、仏さんどうのこの言うても、時代の流れでね、もうこの燈籠焼きらもないようになっていくか分からん。(中略)昔のほうが盛大やったと思う。あの、人間の、終戦の、戦争終わってからやもん、そんなあの魂や仏さんに罰当たるや仏さん拝むやなんやかんやという思想がなくなってきたん。それまではもうあの、なんか願い事あったら手え合わせて仏さんに拝み、助けてもらう」

現在は関係者しか参加しない地元の祭りとなってしまった興国寺燈籠焼きも、昔は多くの見物客で賑わっていたという。町史にも昭和34年ごろは駅に臨時列車が止まったという記録があり、それほど人が多く来ていたということが窺える。しかし

賑やかな一方でケンカや殺傷沙汰になった事件も何度かあったという。見物客が多かった理由は、昔は催しが少なかったうえ、神仏を拝む気持ちが大きかったからではないかと栖原さんは考えている。

「由良で一番力持ちだった人は重いもん提げてそんな仕事した人だったからそんな燈籠らよう提げたけど、この頃もう机に座って鉛筆より重たいもん持ったことないという人ばかりやろ、若い子でも。なかなか体がついていかん。そやからああいう行事だんだん寂れてくると思う。無理よ。うちらでももうその燈籠せんと提灯に、軽く手軽にしていこ<sup>15</sup>。提灯うるさかったら終いにもう、よしぼうところらも、おもやらも竹切ってきて束ねて松明<sup>16</sup>。世話ないわな。嵩ないしな、安上がりやしな。だんだんそうなっていくか。ほいてもう昔は手えあわせて仏さんありがたいう信念あったけど、この頃もう<sup>17</sup>。まゝおばあちゃんらも、どうもそのまゝ小さい時からあるからかもしらん、それが仏教徒の精神かなんか知らんけど、まゝ捨てきれんけど。なんか魂ある、なにかどこかになにかある、て、嬉しいことやええことあったら、ああ助けてくれたんやと思ひ、辛いことあったら、ああ自分ももっと信仰心薄れてきたからやと自分で自分を反省したりするけど」

栖原さんの話には「仏さん」や「拝む心」という言葉が多く出てきたが、この「仏さん」は「神仏」という意味と共に、興国寺燈籠焼きという文脈においては「先祖」をも意味していると推測できる。このことから生きていく上での個人の内面と、イエという狭い単位における繋がりに栖原さんが注目していることが分かる。また自分の死後を考え、家族の負担にならないようにという発言が見られたが、それは家族であり、将来は栖原さん自身を祀る子孫となるであろう筆者のことを意識してのものであったと思われる。この話の途中で、門前に婿に行つた人からのまた聞きの話が出てき

た。

「こいからの時代、よけ信念のもとに生きていく人少なくなっていくんちゃうか。だからああいう昔からの行事もよ、あのこの頃そうや、祭、あっちでもこっちでも祭をばね、伝統ある祭をばね、みんなあ骨折れてね、やめていく土地、いろんな祭りでもせんようになってくこと多いわ。そやからこの燈籠焼きでも廃れていくと思うわ。もう門前の人らに聞いたら夏の暑い時に山に入ってシダ刈ってきて、ほいであのシダもカラカラに乾きすぎてもあかんねん。ほいて乾き足らんでも燃えんのよ。ちょうど頃に乾かさんなねん。ほいで暑いときにごみするあのシダをばくくって、ほいでくるんもね、かとうくり過ぎたら燃えんのよ。ほいてゆるうくくったら燃えすぎんよ。その酸素が入りやすいからな。ほいであの、ゆるうくくったら、ちょうどいいようにとくくったら、崩れてくんのよ。ほやさかこれからの時代あんなことする人もなくなるし、あんなこともせんようになってくるで。」

昔からの行事だが、祭りを続けるのは苦しいのではないかという。昔は法事でご馳走を食べるのが娯楽であったように、近所づきあいやもてなしの風習があった。しかし今はモノが溢れており、法事をはじめとする集まりも廃れて来ている。祭もまた同様に廃れていくのではないかと栖原さんは考えている。

栖原さんは興国寺燈籠焼きをはじめとする様々な行事の原動力を信仰心であると捉えていたが、その感覚は世代や個人によって大きく異なると考えられる。筆者が聞き取りを行った門前地区の人々の話からは信仰心の話は全く聞かれなかった。ここには栖原さんの信仰心や価値観が大きく表れている。

### 3.4 弔う

本節では燈籠焼きに使う檀家の切子燈籠をつくっている畑地区の山塚影俊さん（83歳）の話を書き記す。山塚さんに話を聞いたのは、門前の人への聞き取りの中で檀家の切子燈籠を作る技の継承をする必要があることを聞き、祭の継承に関わるモノについて話を聞きたいと感じたからである。筆者の家は山塚さんに燈籠を作ってもらったことがあるため、話を伺うことができた。聞き取り日時は2018年8月15日14時から15時である。

山塚さんは父親の都合で幼少期は転々としており、東京大空襲の年に千葉の市川から疎開で由良にやってきた。山塚さんは畑地区で大工や商店を行っていた。山塚さんが燈籠を作り始めたのは49年前の父親の燈籠が最初であり、約10年前から近所の人に頼まれて燈籠を作り始めた。山塚さんは筆者の家の燈籠も作ったことがあるため、そこから話を始めた。

「（筆者の家の燈籠は）初盆と3年になんのか、2回くらい僕作らせていただいたように思うけどな。そんな格好やね。今年作らせていただいた方ともお話しさせてもらったんやけどね、よその方からは注文は受けていない。もう畑だけのね、方から作っていただけると相談いただいたらやらせてもらうよという格好でね。あくまでもね、自分がなんていうか、あの、供養のためにと思ってね。だから畑の方だったら大体まゝどその方なくなつたんでと言われればその方思い出しながら、あゝあの方はこんなんだつたなゝと思いがら作らせてもらってるんでね。だから、ま、言い方悪いかもしれんけど、よそから頼まれて商売的に作るということじゃなしに。まゝまゝできるだけまゝ部落の方にはお世話になっているというような格好でやらしてもらってるというのが本音かなと<sup>14</sup>。だからいいものは作ってない。我流でやってるんで。まゝまゝ供養の一つになればなというので」

山塚さんは依頼者に対して代金と引き換えに燈籠を作る。それにも関わらず、話の中で商売的に作

らないという発言が見られたのは、同じ畑地区の人の燈籠しか作らないというように注文の受付を限定しているからである。山塚さんは地区でお世話になった人の供養として「お参りさしてもらおう」という気持ちで作っているという。

「枠作るのはそれほど難しくはないんやけど、時間をかけてやで、あの一ということがもう、今の時代ちょっと違うかなあ。と思うんやけどねえ。だからお宅らみたいに枠だけ作ってもらったらあとまあ自分でぼちぼち型作って貼って仕上げるっていうな、お気持ちのあるっていう家がたくさんあったらえんやけどな、なかなか今はもう、そういう時代と違うみたいやな。うーん。まあぼちぼち年忌やから燈籠作って持ってて焼いてもらおかってな、そんなこっちゃやな。言うたらよお。燈籠が供養になってるのかと俺に言わせたらそうなるんやけど。そやからまあ作るときはだからそれだけ、あの方はこうやったなああやったなあと作っているつもりにしやんけどね」

元々燈籠は各家で作るものであり、それがモーニングワーク(喪の作業)であったと考えられる。山塚さんは燈籠を作る時間と気持ちが供養に繋がっていると捉えており、そのため地区間での繋がりがりや個人への弔いに重きを置いていると考えられる。山塚さんは自分で作りたい人に向けて資料や作り方を提供しているが、「そういう時代と違うんよなあ」と現在との価値観の差を感じていた。

栖原さんへの聞き取りや門前地区の総代の方々の話でも言及されたことが度々あったが、山塚さんも昔の興国寺燈籠焼きは賑やかであったと語る。

「昔は賑やかなお祭りだったし……要するにお参りしようということでもみんな行ったけどな、今はもう燈籠のある関係者だけしか。その、燈籠のない関係のない人っていったら言い方悪いかも知らんけれども、そういう人のお参りは少なくなってるのとちがうかな。まあ燈

籠ある人とそれとまあもちろんあの親族関係の人と、あとアマチュアのカメラマンな。そんなあれだろうな。いい写真撮るから。まあ確かにでも珍しい……その燈籠の送り方でないかな、全国的に見ても。燈籠流すんはあちこちにあるけど、あの燈籠あの火で送るっていうところはそんなにないんちゃうかなとぼくは思う」

昔は大きなイベントだったという感覚があるが、今は伝統だからという意識が強くなっている印象があるという。昔は臨時列車が出るほどたくさんの人が来て賑やかで、子供達は出店を楽しみにしていたが、ケンカなどもあって少し怖かったそうだ。今はお参りしようとする人が減り、年忌の家や親族など関係者のみしか来ないようになったという。

山塚さんは子供の時からよく興国寺燈籠焼きに遊びに行っていたようである。思い出話を尋ねると、昔は今のように車がなかったため、人々が燈籠を竹で作った長い竿にぶら下げて歩いて興国寺まで行っていたのだが、その光景がたいそう風流だったとのことだ。また、以前は旧盆に興国寺燈籠焼きを行っていたので開催時期が一定ではなく、9月に入ってから行われることが多かったという。しかし月はかならず満月だったことが記憶に残っているとのことであった。

以上、第3章では興国寺燈籠焼きに関わる人々への聞き取りを記述した。第1節では「継ぐ」をキーワードに門前区の区長の岡さんの話を、第2節では「担う」をキーワードに興国寺燈籠焼きに関わっている門前地区の池田さんの話をまとめた。第3節では「拜む」をキーワードに畑地区の栖原さんの話を記し、第4節で「弔う」をキーワードに燈籠作りをしている畑地区の山塚さんの話を述べた。これらを通して、行為に関するキーワードを基に、立ち位置の多様性の視点を意識しつつ、4名の興国寺燈籠焼きへの関わり方を見てきた。4名の考え方は地域の人々の考え方を代表するものではないが、行事に関わる個人の生の声の一部で

ある。

## おわりに

本論文の目的は、和歌山県日高郡由良町の興国寺燈籠焼きについて異なる立場の視点から捉え、担い手の意識の差異について考察することである。

第1章から第3章をまとめる。第1章では調査地の概要を整理し、「運営者」、「実行者」、「関与者」という担い手の複数の要素を指摘した。第2章では文献調査と現地調査を踏まえて興国寺燈籠焼きの概要を記した。第3章ではそれぞれへの聞き取りの中で浮かび上がってきた「継ぐ」、「担う」、「拝む」、「吊る」という行為に関するキーワードを基に4人の興国寺燈籠焼きへの関わり方を見た。

興国寺燈籠焼きは六斎念仏、松明踊り、土備燈籠焼きの4つから成る行事であり、時代の流れに応じて変化しながらも、基本形は変わらずに長い期間続けられてきた。この行事は盆行事、仏教芸能、火祭、豊作祈願、力自慢、通過儀礼など複数の面があるが、興国寺の盆行事が下敷きとなっているため、檀家/非檀家によって参加の可否が、どの寺の檀家かによって参加する部分が区別される。檀家による区別の中でも「実行者」と「関与者」は程度でも質でも行事への関わり方が異なる。程度の面では、負担や拘束時間が挙げられる。第2章で詳述したように、「実行者」の携わる土備作り・担ぎは準備にも時間と手間を要するうえ、行事本番での肉体的な負担が比較的大きい。質の面では、共同体の範囲の違いが考えられる。「実行者」の携わる土備は班ごとでの協働作業であり、共同体の範囲は門前地区の中の班である。第3章の聞き取りから、門前区長の岡さんは継承を意識しており、門前地区の池田さんは土備を担うことや門前区の檀家について触れていた。それぞれの班ごとで協力して作業が行われ、松明作りのノウハウの継承や共有も行われるため、そのような意識が強くなるのではないかと考えられる。対して「役割のない関与者」は個々の家で終始しており、共同体の範囲はイエであるといえる。第3章の畑地

区の栖原さんの聞き取りからは宗教的な考えが窺えたが、直接参加するのは燈籠焼きという火送りによる祖先祭祀の部分のみであるため、興国寺燈籠焼きの盆行事的な面を強く意識していると考えられる。なお「役割のある関与者」は携わる事柄によって共同体の範囲はそれぞれ異なる。第3章で触れた畑地区の山塚さんは地区でお世話になった人の弔いの気持ちで切子燈籠を作っていると述べており、地区全体を意識している。

筆者が現地調査や聞き取りをする中で、改めて課題であると感じた興国寺燈籠焼きの継承について私見をまとめる。一般的に取り上げられやすい祭は地域の人々、特に若者が意欲的である場合が多い。しかし興国寺燈籠焼きは長年続いてきた行事であるにも関わらず、とりたてて熱意や意欲が感じられる訳ではない。熱意や積極性が見えづらく、閉鎖的な地域の行事であるにも関わらず、なぜ今まで続いてきて、これからも続けていこうとするのかは興味深い点である。それはやはり、昔から続いてきたものをこれからも継承していくという思いによるものであろう。また日常生活の中に溶け込んで生活の一部となっているということも考えられる。生活の中に組み込まれて習慣化した当たり前のものに対してはわざわざ注意を払うことはないため、担い手に取り立てて熱意や積極性がみられないことも納得がいく。たとえ過去は大きなイベント、華やかな祭という捉え方をされていたとしても、年中行事として根差したものであることには変わりはない。

本稿の執筆を通じて、興国寺燈籠焼きや地元に対する筆者自身の捉え方が変化した。筆者は18年間由良町の畑地区で生まれ育った後、大阪で4年間を過ごした。筆者は高校時代からこの行事に関心があったが、大学進学を機に地元を離れたことで、自分のアイデンティティの1つとして地元とそれを代表するこの行事に愛着が一層深まった。聞き取り調査や現地調査の前は馴染みのある行事の当事者としての気持ちで臨んだが、調査を続けていくうちに部外者感や疎外感を感じるようになっていった。というのも、地元の人々になぜこのような祭をわざわざ卒論で書くのかという問いを

幾度も受け、自分と実際の担い手との温度差を実感したからである。この行事の中心的な担い手である門前地区の人にとって畑・中地区の人々は当事者と見なされていない印象を受けたこともそのような思いを抱くようになった理由の一つとなった。この一連の心境の変化を通じて、筆者自身の中に拠り所として創られていた故郷観に気づかされた。その一方で、筆者には当事者やその土地の者として当たり前と感じていることが多くあり、疑問を持つことや指摘・考察することが困難な部分もあった。このことから当事者研究の難しさを痛感した。

このような地域の祭に関する記述は、伝統文化として継承されるべきである、あるいは継承されて欲しい、という文言で締めくくられることが多い。しかし直接の担い手ではない筆者は、行事を行う負担を実際に経験していない者が行事の継承に口出しできないと感じる。主観的な思い入れを動機に当事者感を持って本稿の執筆に臨んだ筆者は、調査を通じて客観的な視点を獲得し、自身が部外者としての立場でもあることを思い知らされた。民俗は変化するものであり、民俗の変化はその土地の人々に依拠している。社会の変化に応じ

## 注

<sup>1</sup> この部分は1行分の幅に2行で小さい文字を使って書かれている。注釈や括弧のような意味合いであると考えられる。

<sup>2</sup> 同上。

<sup>3</sup> 由良町ホームページ  
[<http://www.town.yura.wakayama.jp/>] より。

<sup>4</sup> 覚真は覚かくぼん 鏡流真言宗から出発して米西、行勇などの禅宗に進んだため、その教えは密教的な修法を取り入れたものであった。また、念仏宗の一遍との関わりや、高野聖の堂聖が覚真に由来することから、念仏にも深く関わっていた。さらに熊野参詣を自ら体験したように神仏混交の思想の中で熊野の神や伊勢の神、由良の八幡宮や白山宮も仏(本持仏)のように崇拜して祀っている[興国寺2000:p.24]。

<sup>5</sup> 聞き取りによると、興国寺燈籠焼きの際は内台(内在)が2組に分かれ、うち1つに山崎と佃が合流する。

て担い手全体の雰囲気や意向も変わり、どのような考えを持つ個人個人がいるかによっても全体の意向は変わる。今後も自身の複数の立ち位置を自覚しながらこの行事の変化の過程を静観したい。

今後の課題は、今回取り上げなかった町内の他の寺での盆行事や、個々の家での盆行事を調査し、記録することである。さらに引き続きこの行事の変化を見守り続け、このような民俗調査を通じてより大きなテーマに踏み込めるようになりたいと考えている。このような個別具体的な事象は理論や既存の枠組みに当てはめると事象そのものの独自性を失う可能性が高いという指摘を受けたが、民俗調査のみだと単なる行事の記録に留まってしまふ。ミクロを見つめながらマクロを眺めるような視点を模索していきたい。

最後に、指導教官の北村毅准教授、副指導教官の安岡健一准教授、聞き取りに快く協力してくださった岡紀行さん、池田喜裕さん、柘原宏子さん、山塚影俊さん、門前地区の皆様、現地調査に際してお世話になった大野治さんに心より感謝と御礼を申し上げます。

川端の記録では、「芝・門・伊賀田・清治」の4班に分けられており、芝は佃班と無常堂より上の内台班で構成され、門は山崎班と無常堂より下の内台班で構成されると述べている[川端2000:p.14]。

<sup>6</sup> 衣装は豆絞り、法被、うちわ、地下足袋は子供会から貸し出しできるが、手甲、腰巻き、法被の上に巻く帯、脚絆は各自で用意しなければならない。衣装は手作りしたり、知り合いのものを借りたり、作ってもらったりする。

<sup>7</sup> 総代の方々は50代後半~70代で、小さいころの思い出話を交えて語ってくれた。興国寺燈籠焼きは供養の一大行事であるが、宗派が変わるまでは出店が多く出ていて活気があり、町内で一番大きい祭であったという。「大人が楽しんでた、昔は、子供だけじゃなかった」という言葉から窺えるように大人も子供も楽しんでたようである。子供のころは川の傍で野球をしたという話や本堂の周りで盆踊りをしたという話も聞いた。

<sup>8</sup> ここ数年からは観客に喜んでもらうため、すぐに開山燈籠を燃やすのではなく、火に近づけて遠ざけるのを何度か繰り返し、じらすようなパフォーマンス性を取り入れているそうである。行事当日は、白抜きで興国寺の寺紋である笹竜胆を染め抜いた紺の法被を着用する

<sup>9</sup> 畑区は明治中頃に上組と下組の両方に六斎念仏講があったが、現在は途絶えた。

<sup>10</sup> 無常堂は広場の入口で簡単な草葺の建物であり、一帯は大門坪という原野である。昔の修善尼寺跡であり、釜場と呼ばれている [和歌山県 1974 : p.216]。

<sup>11</sup> 火伏と言えは愛宕信仰や秋葉信仰があるが、大野は興国寺と秋葉神社。愛宕山の関係を示唆している [大野 1989 : p.64-65,71-72]。

<sup>12</sup> オニシダはウラジロの方言名であるとも考えられる。正月に使うしめ飾りには「ウラジロ」または「ホナガ」といい、この植物が山地で盛んに茂って群叢をなした場合に限り「オニシダ」や「クマシダ」と呼ばれるという [小川 1973 : p.147]。

<sup>13</sup> 2019年1月5日の追加の聞き取り調査によると、岡さんが甲前区長になったのは選考委員会に選出されたからである。区長や念仏衆という立場になったことで、「参加ではなくトップとしての関わり方、意識を持つようになった」という意識の変化があったとのことであった。また、現在の小・中学校の様子を見ていると、岡さんが小・中学生だったころに比べて地元の伝統文化に関する学習が増えており、これからはこのようにして子ども頃から親しむことが大切だと思うと話してくれた。

<sup>14</sup> 「開山」は興国寺のことである。

<sup>15</sup> 初盆や年忌の家は切り燈籠を用意するが、近年は市販の盆提灯や竹を切って束にした松明で代用する家もある。

<sup>16</sup> 「よしぼう」は栖原さんの従姉の息子、「おもや」は栖原さんの家が分家をする前の元の栖原家のことである。

<sup>17</sup> ここでいう「信念」は「信仰」のことだと思われる。

<sup>18</sup> ここでいう「部落」は「集落」のことである。

## 参考文献・資料

- 石塚真 2017『和歌山県内のまつり見聞記Ⅳ』(自費出版)
- 小川由一 1973『紀伊植物誌Ⅰ：紀州時の植物と民俗をたずねて』紀伊植物誌刊行会
- 大野治 1989「法燈国師と天狗と火祭り」和歌山県日高郡由良町教育委員会 1989『由良町の文化財』第16号
- 大野治 1990「興国寺の末寺・塔頭」御坊文化財研究会『あかね』第12号
- 川端邦男 2000「興国寺燈籠焼：県指定無形文化財を支える人々」『由良町の文化財』第27号
- 興国寺 2000『由良の文化財：重要文化財木造法燈国師坐像修理記念』
- 田中敬忠 1979『紀州今昔 和歌山県の歴史と民俗』聚文堂
- 中津芳太郎編 1985『紀州日高地方の民話』ぎょうせい
- 由良町誌編集委員会 1991『由良町誌 通史編 下巻』
- 由良町社会科教育研究会 1991『郷土のあゆみ 由良』由良町教育研究会、社会課部会
- 由良町中央公民館、由良町編 1981『公民館報・広報ゆら』
- 和歌山県 1974『和歌山県文化財調査報告書8』歴史図書社
- 和歌山県日高郡役所 1923『和歌山県日高郡誌 1』
- 由良町ホームページ  
<http://www.town.yura.wakayama.jp/>  
 和歌山県地図  
<https://uub.jp/47/wakayama/map.html>